
ポニーテールデストロイヤー

ヒッツカラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポニーテールデストロイヤー

【Nコード】

N9003G

【作者名】

ヒイツツカラルド

【あらすじ】

女の子同士が繰り広げる格闘技ストーリーです。

二人の少女（前書き）

女の子同士が顔面を殴ったり、ポキッといったりしますので、バイオレンスに抵抗がある方は、おさけになってください。

1ページに一個は誤字があると思います。

お気になる方は、はじめからお読みにならない事をおすすめします。

二人の少女

周りの景色が暗くなってから、かなりの時間が過ぎていた。テレビの番組は、既に深夜番組が始まっている。

青と白が鮮やかなスポーツウェアに、赤いジョギングシューズを履いた女性が走っている。

彼女のアスファルトを蹴るシューズの音だけが、静かな夜の空間に響いていた。

走る彼女は、黒く長いストレートの髪を後頭部で縛り、ポニーテールの髪を引き締まったキュートなヒップの前で、本物の尻尾の様に揺らしていた。

身長は160cm後半だろうか、170cmまでは無さそうだ。

体型は、スマートなものだった。

しなやかで美しい。

走る姿からバンビを連想させる柔軟なフォームの女性だった。

年の頃は17、8歳だろうか、シャープな顔付きで、きりっとした視線から凛々しさも感じられる。

少々キツイ感じもしたが、美人で有ることを否定できない程に、整った顔立ちだった。

そのポニーテールの彼女が走っているのは、静まりかえった深夜の住宅街。

既に何軒もの家からは、灯りと人の気配が消えていた。それだけ遅い時間帯なのだろう。

電信柱の街灯が、走る彼女を順番に照らしていく。
結構速いスピードである。

暫くして彼女は、住宅街の真ん中に有る公園へと入って行った。

2メートルぐらいの高さがある垣根に囲まれた、昔から有る古い公園。

公園内には、幾つかの遊具が置かれており、住宅街の中に有る公園のわりには、かなり広い物だった。

ポニーテールの少女は、そんな遊具に囲まれた公園の中央で、温まった体を冷やさないように軽く足踏みを続けている。

公園を囲む背の高い垣根達が、彼女の姿を公園外から窺えないように隠していた。

最近の公園では、その様な垣根を作らなくなっていた。

理由は、公園外から中が完全な死角になり、周囲の人々が子供達の危険に気付く難くなるからとの理由だ。

アメリカなどでは、誘拐犯や変質者から子供を守ると言った理由で、公園内に死角を作らない様にするのが主流である。

最近では、日本もそれに似せて公園を作るが、昔のまま植木などの生け垣が残る公園も、改善される事無く残されている場所が多い。

ジョギングをしながらポニーテールの少女が入って来た公園は、その古いタイプの公園であった。

ブランコの揺れる音がした。鉄が擦れる音だった。

ポニーテールの少女は、足を止めてブランコの方を見る。

ブランコに座る一つの影。そのブランコを揺らしながら、その影はブランコからゆっくりと降りた。

女性の様だ。いや、少女の様に見えた。

少女は、踵で地面を擦りブランコの揺れにブレーキを掛けると、そこから降りる。

身長は、ポニーテールの彼女より若干低く、体型も若干小さく見えた。

袖の長いグレーカラーのタートルネックプルオーバーの上に、ブラツクのワンピースを着ている。

そのワンピースの黒さが夜に溶けて、ブランコが音を鳴らすまでポニーテールの少女は、彼女の姿に気付かなかった様子だ。

髪は背中の中ぐらいまで有り長い。

その長い髪の両サイドを三つ編みにして、更にその三つ編みを後ろで結んでいた。

ポニーテールの彼女は、活発な陸上部と言ったイメージが強かったが、彼女のイメージは、顔付きが穏やかで清楚さを感じさせている。お嬢様系だ。

ポニーテールの少女が、黒のワンピースの彼女を睨んでいた。

ワンピースの彼女が、ゆっくりとした足取りでブランコから離れてポニーテールの彼女に近づいて行く。

そのワンピースの少女を見ながらポニーテールの少女は、スポーツウェアのポケットから、可愛いピンクの封筒を取り出した。

「まさか、柔道界のお姫様から、こんな物が送られてくるとはさ」

ピンクの封筒を団扇代わりに使って、ランニングで火照った顔を仰いでいた。

そのポニーテールの少女の表情が、いやらしく公園の夜に溶けて行く。

「こんな時間に呼び出してごめんなさい。でも、私の思いをどうしても伝えたくて」

優しい感じのする話し方だった。

「私、女子高だったからさ、女の子からラブレターを貰うのに慣れていたけど。まさか、こんな刺激的な内容の手紙を貰うのは初めてだったわ」

「喜んで貰えましたか？」

優しい笑みで軽く首を横にかしげながらお嬢様系の少女がそう言った。

「ええ、とても」

ポニーテールの少女も笑顔で返した。

「では、果し合い……。受けて貰えますでしょうか？」

サバサバした話し方のポニーテールの少女とは違い、ワンピースの少女の口調は、丁寧で穏やかな物だった。

しかし、その口から場違いの様な単語がポロリと出てきた。

「理由が分からないわ」

ポニーテールの少女は、そう言うのと両拳を腰に当てた。

その表情からは、呆れた様な感じが見て取れる。

「高校在籍中に、女子柔道の全国大会では、常に上位常連。大学に進めばオリンピック代表間違い無しとまで言われていた貴方がさ…」

ポニーテールの少女の話を聴くワンピースの少女は、常に笑顔であった。

「突然、柔道部も無い女子短大に進んで、柔道界から去っておいなさ…」

ポニーテールの少女は、そう言いながら爪先で公園の土を蹴りながら、真っ直ぐにワンピースの彼女を睨んでいた。

「なんで、こんな場所でさ、空手の私に果し合いを挑んでくるのかな」

そう言って、ピンクの封筒を、ワンピースの少女の足元に投げ捨てた。

そのピンクの封筒を拾いながら、今度はワンピースの彼女が話し始めた。

「貴方は、忘れてしまったのですね…」

そう言うワンピースの少女は、寂しそうな表情をしていた。

「忘れた？」

ポニーテールの少女が、その言葉に首を傾げた。綺麗な黒髪の尻尾が僅かに揺れる。

「去年の光臨館フルコンタクト大会女子の部、17歳ながら特別枠で社会人部門の大会に出場して、見事に3位」

「それが、貴方と何の関係が？」

「やっぱり、お父様の後をお継ぎになるのですか？」

「いいえ、女の私が館長の座に就く事は無いわ。今年の春からは、道場の事務職よ」

「私の将来は、お父様の会社を継ぐことになっているの」

「それで、柔道を捨てたの？」

「ええ、その通りですわ。でもね、私が柔道を始めた理由は、オリンピックを目指すためじゃないですから、それでいいですよ」

ワンピースの少女の笑顔が、一段と輝いて見えた。

「じゃあ、何で始めたのさ、柔道を？」

「貴方達に、勝つ為よ」

素朴な質問に、先程までの優しく微笑んでいた彼女の顔が、狂気なものへと一瞬で豹変する。

両目を見開き、口が耳まで避けそうなほど釣りあがっていた。まるで妖怪だ。

ポニーテールの少女の背筋に、冷たいものが僅かに走る。

そして、ランニングで暖まっていた体が、その表情に冷めていくのが分かった。

この子、可笑しい、と、思っていた。

「それでは、約束を果たしましょう」

そう言いながらワンピースの少女は、左足を少し前に踏み出し、両手のひらがポニーテールの少女に見えるように突き出す。

若干体勢を低くした彼女は、今にもポニーテールの少女に掴みかけようとしていた。

両手の指が、目の前に居るポニーテールの少女の胸を鷲掴みにしてニギニギしたいかのように、いやらしく何度か動いていた。

「戦う理由が分からないわ？」

そう言いながらポニーテールの彼女は、両拳を握り、真剣な眼差しで構えを取った。

右拳を右頬の前に添えて、後ろに引いた右足に重心を大きく乗せている。

左拳は、肘が45度の角度を保つ形で前に出されていた。

パンチもキックも出せる構えだ。

襲い掛かるならば、返り打ちにするとはいたげな構えであった。

「あの約束を貴は、忘れてしまったのね……」

先程投げ捨てられたピンクの封筒の中には、同じ柄でピンクの便箋が入っていた。

その可愛らしい便箋には、果し合いの申し込みが書かれていたのだ。

今宵、この場所で、この時刻にと。

ここに来たと言う事は、ポニーテールの彼女が、それを受けたと言う形になってしまっている。

少なくともワンピースの少女は、そう思っていた。

ポニーテールの少女の名前は、『王森 アキラ』18歳。

今年高校を卒業して、父が経営している空手道場の本部事務所に事務員で就職する予定になっていた。

彼女の父は、日本全国に150の支部を持つ光臨館空手道場の館長だった。

海外にも幾つかの道場を構え、世界的に有名な流派である。

現役時代は、ケンカ空手を使う事で有名な人物で有り、引退した今でもその名前は、格闘技マニアの間で広く知られていた。

片やワンピースの少女の名前は、『板垣 亜美』18歳。

同じく今年高校を卒業して、今年の春から有名女子短大に入学が決まっていた。

彼女の父は、以前、オリンピックの柔道強化選手に選ばれたが、オリンピック代表選手までには選ばれなかった柔道家であった。

そして、柔道出身の格闘技家として一時期その名前が売れた時期があった。

異種格闘技戦で、色々な試合会場に柔道家として顔を出し、注目を浴びたのだ。

しかし、既に現役を引退している。10年前ぐらいの話だ。
現在は、貿易商で成功を収めて、億万長者の仲間入りを果たしている人物であった。

どちらとも一般人から見れば立派なお嬢様である。
その二人が、夜の公園で睨み合う。

アキラの方は、亜美の事を雑誌などで見た内容でしか知らないらしい。

曰く、セレブ柔道家。

曰く、柔道界のプリンセス。

曰く、ハリケーンカタパルト。

色々な字が、彼女に付けられていた。
あざな

しかし、はっきりと分かっている事は、柔道家として強いと言う事だけだ。

アキラは、亜美の事を、そのぐらいしか知らない。

否、亜美曰く、忘れているらしい。

亜美の方は、アキラの事を昔から知っている様子だ。

アキラだけが、その過去を忘れているだけのようだった。

「光臨館の門下は、男も女も挑まれたら逃げないわ。挑まれたら誰だろうと受けて立つ」

そう言いながらアキラは、爪先でステップを踏み、リズムを取り始めた。

亜美の挑戦を受けて立つつもりだ。

「私は、貴方達に勝てれば良いの」

「光臨館に？」

「いいえ、貴方達によ。私は、その為だけに柔道を始めたのだから。光臨館とか、空手とか、親とかは、まったく関係無いですわ」

亜美とアキラの台詞が、若干噛み合っていなかった。

「何でもいいわ、叩きのめしてあげる」

「私は、折るわよ」

二人の美少女が、過激な言葉を飛ばし合う。

亜美の言った言葉にアキラが、この勝負は、そういった部類の戦いなのかと思った。

亜美は、折る、と言った。

ならば、此方も覚悟を決めなくてはならない。

半殺し。

此方は、死ぬか死なないかの寸前まで力を籠めて殴らなければとアキラは戦いのレベルを決める。

これは、そこまでやる勝負だと心に決める。

「やれるものなら、やってみなさいよ」

アキラは亜美の両手のひらを見て思った。

柔道。

亜美が柔道を使うのは分かりきっていた。

掴まれなければ100%勝てる。

掴まれなければ、投げられない、関節も取られない。

掴まれず、掴ませない、そして殴る、そして蹴る、そして勝つ。

アキラは、そう考えていた。

亜美が一步前に出た。

まだ、パンチが届く間合いではない。掴むには、更に遠い。だが、キックは届く。

それは、アキラの間合いだ。

「せい！」

アキラの右脚が地面を蹴って跳ね上がった。

蹴りが亜美の顔面を狙う。

速い。

フェイントなど考えていない、真っ直ぐで素直な蹴りだった。

亜美は、顎を引き、体を後方に反らして蹴りをかわした。

蹴りが亜美の顔面の前を通り過ぎ、アキラの鋭い蹴りが空を切った。

その蹴りで煽られ生まれた風が、亜美の前髪を揺らす。

素人に空手家の蹴りがかわされた。

空手の使い手と知って挑むのだ、この程度の蹴りを回避できなくて話にもならないと、蹴りを繰り返したアキラの口元が笑っていた。

蹴り足が地に戻る。まだ、アキラの間合いだった。突きと蹴りの間

合い。

続いてアキラの中段後ろ廻し蹴りが、長いポニーテールを靡かせながら放たれた。

亜美の腹部を狙って飛んできた蹴りを、目を見開き奇怪な表情で亜美が、両手で腹を抱える様にガードした。

亜美のガードの上に、アキラの踵がスタンプされる。

スピーディーで鋭い蹴りの重みが、ガードした腕を抜けて腹部に伝わって来た。

その勢いで亜美の体が後方に、1メートル程飛ばされた。

亜美の体が、足元の地面に両足でブレーキをかけると、二本のライオンを残して止まる。

ガードの上からでも、その後ろ廻し蹴りの衝撃は、亜美の内臓へと届いて居るだろう。

しかし、亜美は、それを表情に出さない。ぐっと堪えてポーカーフェイスを保つ。

「あらあら、お嬢様、どうしたのかしら」

後ろ廻し蹴りを放ったポーズのままアキラが笑った。

亜美の我慢が、アキラに悟られている。

「その程度で調子に乗らないでください……」

大きく目を見開き笑う亜美は、更に背を丸めて低い構えを取った。

見ているアキラにも分かった様子だ。

亜美は、柔道技の朽木倒しを狙っている。アマレスで言う、両足タックルだ。

その低い構えが、それを悟らせる。

グラウンドに持ち込む気だ。

アキラにも亜美の構えから作戦が読める。

亜美が飛び込んできたなら膝を顔面に突きたて、上から肘を叩き込む。それがアキラのプランだった。

アキラが心の中で「さあ、来い！」と呟いていた。

まもなくして亜美が、アキラの予想した通りに、低い体勢で飛び込んできた。

地面を滑るように、ギリギリの低さで、流れ込む小川の水の様に。

読んだとおりだった。

「くらえ！」

アキラは、プランどおりに膝を突き出した。

しかし、その膝が激突すると思った寸前で、亜美の両脚に力が入る。そして亜美の体が跳ね上がった。

アキラの膝は、亜美の顔面に当たらなかった。狙いを外す。

「引っかったのは、貴方ですわ！」

真下から迫る亜美のアップー気味のフックが、アキラの右頬に叩き込まれた。

そして、力いっぱい振り切られる。

鋭く重い一撃。

亜美の方を見ていたアキラの視線に、公園の外灯が一瞬見えた。顔が左右に激しく揺れたせいだ。

空手家の自分が、柔道家の打撃をもろに喰らった。
不覚。

その思いがアキラの脳裏に過ぎる。そしてパンチの衝撃が、その思いを脳ごと大きく揺らした。

空手家が、柔道家のパンチをまともに喰らう。

アキラは、顔に受けたパンチのダメージよりも、その事に動転していた。

次の瞬間、アキラの右手首が、亜美に掴まれていた。

掴まれなければ勝てる筈が、今掴まれた。

だからと言って負けたわけではない。

少しばかり柔道家の亜美が、有利なポジションを獲得しただけだ。

「せえああ！」

ローキックを放つアキラ。

亜美の腿の裏側に、鞭に打たれた様な音を響かせアキラのローが叩き込まれた。

亜美の体に、苦痛が電流のように走り貫けた筈だ。

だが、その痛みを受けても亜美は、掴んだアキラの腕を離さなかった。

更にアキラが拳を振りかざした。

その時、掴まれた手首が捻られる。

手首の関節が、決められた。

続いて、捻られた腕が亜美の脇の下に挟まれる。

肘の関節が、決められた。

アキラの腕に亜美の体重が、上からのしかかって来る。

肩の関節が、決められた。

アキラの体が、胸から地面に落ちて、左頬に公園の土が付いた。
左腕の関節が三箇所同時に決まり、真っ直ぐに天へ向かって伸びている。

「!!!!!!」

脇固めだ。

アキラの左腕が、亜美によって捻り上げられ、みしみしと音を立てると、アキラの顔が苦痛に歪む。激痛がアキラを苦しめる。

「参ったと言ってください」

右肩を決めたまま亜美の体が、アキラの上に乗っていた。

そして、ギリギリと関節を絞り上げながらギブアップを求める。

「にiiiiiiii!」

アキラの肩に激痛が流れる。

肩が、関節が、筋肉が、靱帯が、骨が、亜美のサブミッションに悲鳴を上げていた。

しかし、アキラの口からは、敗北を認めるような言葉は出ない。

地面に頬を押し付けたまま、苦痛に、屈辱に、情けなさに耐えていた。

空手が、柔道に負けるわけが無いとアキラは思っていた。

打撃技を使う空手が、打撃技を持たない柔道に負けるとは思っていなかった。

自分が目の前の相手に負けると思っていなかった。

それは、傲慢。

アキラの身勝手な思い込みでしかなかった。

しかし、その傲慢に彼女は気付いていなかった。
そして、現実には、今こうして敗北寸前である。

「参ったと、負けを認めてください!」

「私は、空手は、負けない!。光臨館は、この程度で負けない!」

「ならば、折ります!」

「折ればいいさ!」

悔しそうな叫びだつた。

「光臨館は、負けない！」

アキラが、そう叫んだ瞬間、

ブチブチ、ごきつ！。

と、鈍い音が公園内に響き渡った。

「い ! ! ! ! ! !」

アキラの口から、悲鳴に堪えるような音が漏れる。地に付いた頬から、地底に向けて放つ低い声だった。

亜美が、アキラの左腕を開放して起き上がると、アキラの右腕が、力無く地面にボトリと落ちた。

$$\left[\begin{array}{c} \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \\ \vdots \end{array} \right]$$

地をのた打ち回るアキラ。

それを亜美が棒立ちで見下ろしていた。

立ち上がらなくては、と思ったアキラが、体を起こそうと右腕で地面をついた。

しかし、折れた左肩から腕がダリとぶらさがるだけで激痛を走らせ、起き上がるとするアキラの動作を邪魔していた。

アキラが、幾ら見苦しくもがいても、自力で体を起こす事は出来ない。

動かない左腕と、痛みが邪魔をしてバランスが取れない。必死に努力しても立てないのだ。それが悔しく顔を更に歪めた。

亜美は、アキラの側に立ち尽くし、大きく見開いた目で見下ろしていた。

口元は、既に笑っていなかった。しかし、やたらと冷たい表情で見ている。

そして、もがくアキラのポケットを探り、彼女の携帯電話を取り出す。

「119番に電話しましたわ」

そう言って、倒れながらもがき続けるアキラの顔の横に、彼女の携帯をそっと返すように置いた。

置かれた携帯からは、男性の声が聴こえて来ていた。どうやら119番のオペレーターが、返事が無い電話の相手に状況を訊きだそうとしている様子だった。

「うう……ううう……」

アキラが痛みから籠もった声を漏らす。

その声が、電話の向こうまで届いている様子で、電話の向こうから更に質問が続く。

亜美の顔は、穏やかな笑みに戻っていた。

「まずは、一人目……」

そう呟き亜美は、倒れているアキラを残して公園の出入り口へと歩き出した。

「武留^{タケル}ちゃん、待っていてね。きっと私が一番になってあげるから」

そして、地を這うアキラを夜の公園に残して亜美は、夜の住宅街へと姿を消していった。

二人の少女（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

これからも誤字など読みにくいところが多々あると思いますが、末永くお付き合いの程をよろしくお願いします^^

不波流古武道

公園での一戦後から約二ヶ月。アキラの肩も随分と完治していた。

病院を退院していらいアキラは、左肩を釣りながら光臨館本部道場の事務職をこなしていた。

力仕事は無理であったが利き手は動くので、ちょっとした事務作業は問題無くこなせたからだ。

稽古も再開していた。

最近では、リハビリを兼ねた軽い運動から、本格的なトレーニングへと移行しはじめている。今では、自慢の黒髪をひとりでポニーテールに縛ることも出来るようになっていた。

しかし、あの晩、板垣亜美に折られた左肩は、未だ本調子ではない。少しハードな運動をすると、痛みが走ることが多かった。まだ組み手までは無理な常態である。

そんなアキラは、休みの日になると、愛車のバイクに乗り、ひとりある道場へと通っていた。

その道場は、父が館長を勤める光臨館系の空手道場では無かった。

そしてジーンズに厚めの革ジャンを着たアキラのバイクが、今日もまた住宅街に在る古びた一軒家の前に停車した。そこにむ、最近通っている道場がある場所だ。

アキラがやってきた住宅は、古びた木造建ての家構えだが立派な作りで、玄関まで続く広い庭には、手入れが行き届いた植木が並んで

いた。

アキラは、その家の敷津内に愛車を停めると、フルフェイスのヘルメットをハンドルに引っ掛け奥に進んでいく。

アキラが家の敷地内を進んで玄関を目指すと、その玄関前で、ひとりの女性が竹箒を手には枯葉を掃除していた。

その女性にアキラが明るく声を掛ける。

「こんにちは、瑠璃子さん」

「あら、アキラちゃん、こんにちは」

女性もアキラに気付くと、明るく優しくそうな笑みを見せながら挨拶を返した。

年の頃は二十代半ばぐらいだろうか。ストレートの黒髪で、スラリとしたスタイルの良い女性だった。

ロングスカートに七分袖のチェニックブルオーバーを着て、その上にピンクのエプロンをさげていた。

結構な美人に見えたが、しゃべりや仕草からとろさを感じさせる女性だ。

「お父さんなら、離れの方にいるわよ。でも今、お客様が来ているみたいなの」

「お客さん?」

「ええ」

「とりあえず覗いてみます」

瑠璃子がそう言うと、アキラはにっこり微笑みながら頭を下げた。

そしてアキラは、家の玄関には進まずに、庭の奥の方へと進んでいく。

植木と家との間を進んで裏側に回り込むと、住宅に隠れていて見えなかった建物が見えてきた。

アキラは、その建物へと向かう。

その建物は、路地から見えた住宅ほど立派な建物ではなかったが、木造一階建ての古風な建物だった。

アキラは、その建物の古い玄関を、ガラガラと音を立てながらスライドさせて開いた。

そこは、畳張りの道場だった。空手や柔道の試合が出来るぐらいの広さは十分にある。

アキラが開けた扉の横には、不波流古武道と書かれた看板がさげてあった。

ここは、古武道の道場である。

アキラがその道場内を覗き見ると、先程玄関前で瑠璃子が話していた客と思われる人物が目に入ってくる。

年の頃は三十ぐらいの男性で、白い道着に黒帯を締めている。

胸の部分に、龍剛会館と刺繍されていた。きいたことの無い道場名だった。

その男の前に、この道場主の男性が立っている。

少々広いおでこに白髪混じりの短髪、そして右顔に長い刀傷がある。年は五十歳と聞き及んでいた。名前は竜崎竜蔵。

今日、アキラが此処に来たのは、この人物から教えをこう為であった。

この竜崎竜蔵は、古くから伝わる武術、不波流の十五代目後継者である。

不波流とは、かの有名な柳生の分家として伝わってきた流派で、柔術・和術・拳法にたけた流派である。

アキラは此処最近、不波流に、柔術などの技を習いに来ているのだ。もちろんその目的は、柔道・板垣亜美へのリベンジの為だ。

あの敗北の後、本部の門下生たちが、板垣亜美のことを色々と調べてくれた。それで分かったことがあった。

板垣亜美は、アキラと戦う前に、王道塾と呼ばれる空手道場で、空手対策を習っていた。

その王道塾とは、アキラの光臨館とは長年のライバル関係でしのごあっている空手の流派で、その組織規模も光臨館と肩を並べるほどの大きさである。

そこで亜美は、空手対策を学んでからアキラと戦ったのだ。

アキラは、それを聞かされた時に、「やられた」と、思った。だが、当然と言えば当然の行為だ。

他の格闘技の試合でも、対戦相手の研究を確りして作戦を立ててから挑むのが当然である。

亜美は、それを当然の如く行ったにしかすぎない。アキラの方が迂

闊だったのだ。

そしてアキラは、心に決意したのだ。

此処で確り投げ技や関節のディフェンスを習得して、今一度亜美に挑戦するのだと。負けっぱなしでは、空手家としてのプライドが許さなかった。

例え女同士の決闘とは言え光臨館の人間が、他流に負けて、そのまま引き下がる訳にはいかないのだ。

「龍剛会館……。あ、あの人」

道場主の竜崎竜蔵と向かい合う男の顔を見ていたアキラが、ふと、その顔から思い出す。

「あの人たしか、今年の大会に出ていた人だわ」

アキラが属している光臨館空手が主催した冬のオープントーナメント。その決勝トーナメントに参加していた男であった。

男は地方予選を勝ち抜き、全国大会参加者百二十八名に食い込んできた数少ない他流のひとりであった。

流派や名前は覚えていなかったが、その凛々しい面構えだけは覚えていた。

結構ダンディーでカッコイイからだ。ちょっぴりアキラの好みかも知れない。

そう思いつつアキラが二人の男達を見てみると、二人がゆっくりと構えを取り始めた。

「組み手を始めるのかしら？」

アキラの言うとおりである。二人は、これから組み手を行う。正確に言えば、この龍剛会館の男は、道場破りなのだ。

男が尋ねて来たのは、アキラが顔を出す少し前の話だ。突然現れて、突然に言い始めた。

竜崎竜蔵が、道場でアキラを待っていると、アキラよりも早く現れたのが、この男だった。

玄関先で掃除をしていた瑠璃子に「竜崎竜蔵氏は、居られますか？」と尋ねると、家の裏手にある道場へと招かれたのだ。

瑠璃子は、この男が父を尋ねて来た普通の来客だと思っているようだった。

男の名前は、堤下和夫、二十八歳。龍剛会館という小さな道場の門下生だ。

此処最近、自分が小さな頃から通う道場を、もっと大きくしようと考え、他の団体の大会に出場したり、こうして道場破りを繰り返していた。それが、道場のCMになると信じて。

その堤下と竜崎が睨み合う。

白い上下の道着姿をしている堤下に対して竜崎は、上が浅黒い道着で、下は黒い袴姿だった。剣道の道着に似ている。

空手と古武道の戦い。アキラにとっても初めて見る異種格闘技の組み合わせ。

アキラが此処に通い始めて、初めて竜蔵氏が戦う光景が見れる。

だが、アキラは知っていた。よわい五十の竜崎竜蔵が、どれだけの手練であるかを。

此処数回、この道場に通っている間に、その身で感じ取った竜崎竜蔵の実力は、間違いなく超人レベルである。

おそらくこの歳でありながら光臨館主催のオープントーナメントに参加したのならば、間違いなくいい所まで行くであろう。そうアキラは読んでいた。

そして、道場の玄関から一人アキラが観戦するなか二人の男が小さく構えを取る。

堤下の構えは、正中腺に揃って拳を立てに並べて構える。胸の辺りに左拳、その真下、水月の辺りに左拳があった。

縦に並んだ二つの拳が、真っ直ぐに対戦相手の方を向いている。

一方の竜蔵も同じ構えを取っていた。ただ構えた拳が、グーではなく、パーの形であった。

大きく広げた指の先が、対戦相手に向けられている。

似た構えの二人が、互いに相手の隙を窺う。微動だにしない。

睨む堤下に対して竜蔵は涼しい顔をしていた。

その表情をアキラが見て、先に動くのは若い堤下ではないかと予想した。

アキラが開けた玄関口から、緩い風が道場内に流れ込んだ。二人の男は、アキラの存在には気付いていない様子だ。

だが、緩やかな風には気付く。ピリピリと集中して敏感になった肌で風を感じていた。

そして、その風が、堤下の闘志を煽った。ついに堤下の方から動いたのである。

右上突き。

拳タコが四つ縦に並んだ突き技が、素早く、真っ直ぐに竜蔵の顔面を狙う。正拳突きのような捻りを加わった突き技ではなかった。だが、速い。

竜蔵の右手が、その突きに反応して動く。顔の前に掌を移動させて、堤下の縦拳を受け止めた。

パチンと音が鳴った。その音と同時に竜蔵の左腕が下から跳ね上がり、堤下が放った拳を下から弾き飛ばした。

堤下の拳が上へと弾かれると、弾いた竜蔵の左手の下から、今度は堤下の右正拳が空気を抉りながら飛んでいく。

その二発目の拳を再び竜蔵の右掌が受け止めた。また、拳と掌から、パチンと乾いた音が鳴る。

二度の攻撃を捌いた竜蔵が、後方に下がった。しかし、堤下は追わない。

だが、後方へ下がった竜蔵が、壁に跳ね返ったように前に出た。その動きに堤下が一瞬驚き体に入力を入れる。

拳を握らずに脱力した竜蔵の左手が、親指側から流れるように下から上へと飛んで行く。

その攻撃は、堤下が作る両手のガードの間を切り裂きながら顎先を狙い進んでいった。

堤下は、顎を引いて竜蔵の技をギリギリでかわした。目の前を竜蔵の太い指が通り過ぎて行くのがはっきりと見えた。

だが、次の瞬間、堤下の腹部に衝撃が響く。竜蔵の右拳が減り込んでいた。

堤下が、うっ、と、僅かに声を漏らして腰を丸めた。

更に攻撃が続く。

竜蔵の体が左から右へとスイングされると、その体捌きから勢いを付けた左の肘鉄が、堤下のテンプルを狙う。

ボディーを打たれてから流れるように続く攻撃に、腕を上げて防御を固める堤下。

その顔の横に作られたガードを竜蔵の肘鉄が容赦無く叩いた。ガードの上からでも肘鉄の威力の大きさが感じ取れた。堤下の視界が揺れる。

そして、肘鉄をブロックした腕に、肘鉄が蛇の様に動いて絡みつく。気付けば堤下が作ったガードに竜蔵の両腕が、ガッチリと組み付いていた。

竜蔵が、関節技を取りに来たのだ。

竜蔵が仕掛けてきた技は、プロレス技で言うアームロックだ。

しかし、不波流では別の名で呼ばれている。羽折雀上固めだ。

両手で相手の腕をL字に決めながら、上の方へ肩を捻って絞り上げる形の為、見たままの名が付けられていた。

これを逆に背中側に縛り上げる様に肩を決めると、羽折雀背方固め

と名が替わる。

そして、肩折上固めを仕掛けた竜蔵が両手に力を籠める。だが、技は完全に決まっている様子ではなかった。

堤下が密着してきた竜蔵の腹に、横から膝を振り当てる。

膝蹴りを脇腹に喰らった竜蔵の体が、くの字に曲がって大きく揺れた。

その光景から、膝の重さがアキラにも感じ取れた。

やはりパワーでは、堤下の方が上のようなだった。

膝蹴りの衝撃で、腕を絡め取っていた竜蔵の力が緩む。

そこに堤下の肘が竜蔵の胸を強打していた。

竜蔵の肋骨が、強く圧迫され振動が上半身に響いた。

そして、アームロックに決められかけていた堤下の腕が、竜蔵の腕の中から力任せに引っこ抜かれ逃げていく。

関節技を決められかけた腕を救出した堤下が、上段廻し蹴りを豪快に放った。

その見事な蹴り技を竜蔵は、身を屈めながらくぐるようにしてかわすと、スエーバックしていく。再び二人の間合いが広がる。

しかし今度は、堤下が逃がすまいと直ぐに追った。大きな一歩で前に出る。

その一歩に合わせて竜蔵が爪先を突き出し、蹴りを放つ。

竜蔵の爪先が、堤下の脛を蹴っていた。堤下の顔が、痛みに歪む。

だが、堤下は、その程度で止まらなかった。そのまま予定どおりの左ジャブを放つ。

しかし、その拳は、竜蔵の顔面まで届かない。鼻先まで届いていた

が、ヒットまではしなかった。

鼻先までジャブが迫っていたにもかかわらず竜蔵は、そのジャブが届かないことを知っていたかのように動かなかった。

二人の距離感を、完璧に把握している様子だ。

ジャブを引いた堤下が、続いて右豪腕をフックに変えて打ち放つ。

しかし、その豪腕を、綺麗な上段受けですんなり受け流す竜蔵。

竜蔵は、堤下の攻撃を捌くと同時に攻撃を繰り出す。

顔面を狙った縦拳。

堤下は、その攻撃をかわす事も防ぐ事も出来ずに、もろに喰らってしまう。

堤下の視界が、パチパチと弾けて白く染まった。

「人中に一本拳！」

アキラが竜蔵の出した技を見て声を上げた。

その技、その拳の形は、普通の縦拳ではなかった。人差し指の第二関節が突き出された不思議な拳の形だった。

その拳の第二関節が、鼻と唇の間にある人間の急所のひとつ、人中を鋭く叩いていた。堤下の鼻から凄い勢いで血が飛び出る。

人中への一本拳。

それは、今時のスポーツ化した格闘技の試合では、危険な技すぎて見られなくなった技のひとつであった。

打たれる側への危険性もそうだが、打つ側への危険性も高い技である。

一本拳とは、打ち込む場所を誤れば、その指がポッキリ行ってしまう。

う危険な拳の形である。

諸刃の刀といえる技である。

生まれた時から空手と共に成長してきたアキラですら、一本拳などという危険な技を見るのは、長い空手人生で二度目の事であった。

まだアキラが小さな頃の話だ。六歳か七歳だったであろうか。

そこは、プロレスのようなリングが有る道場だった。否、道場と呼ぶより、灰工場のような場所だった。

ボクシングのリングなのか、プロレスのリングだったのかは、幼いアキラに違いは分からなかったが、そこには間違いなく四角いリングがあった。

そして、数多くのベンチプレスや鉄アレイなどのトレーニング器具が転がっており、天井からサンドバックなども吊るされていた。

その灰工場でアキラの父が、幾人もの屈強な男たちに混ざってトレーニングを行っていた。その人物たちは、明らかに空手家たちではなかった。

まだ、光臨館の館長を継いでいないが、光臨館の前館長の娘と結婚して、王森家の婿養子になっていた父が、何故にこのような場所でトレーニングをしていたのかは、幼いアキラには分からなかった。しかし、当時の事が何となく記憶に残っていた。

そのリングの上で一度だけ父が、他の男と本気の組み手を行ったのだ。

ヘッドギアも付けずに、拳サポもレッグガードも身に付けないでの

組み手。

いや、組み手と呼ぶには激しすぎる戦いだった。それは、死闘に見えた。

勝負は、アキラの父が勝利した。アキラの父も多少のダメージを負っていたが、対戦相手の方に比べれば軽症である。

対戦相手は、頬、目蓋、唇が大きく腫上がり、試合前とは別人の様な顔になっていた。そして口や鼻からダラダラと血を流していた。

アキラの父が、対戦相手に対して最後に打ち込んだのが、人中への一本拳だった。

その一撃を最後に対戦相手はリングの上で大の字に倒れると、ピクリとも動かなくなったのだ。

そして、その対戦相手の男を、それ以降を見ることは無くなったのである。

だが、堤下は、その時の男の様に、一本拳を人中に喰らってもノックダウンはしなかった。

鼻からダラダラと血を滝の様に流しながらも踏み止まっていた。実に素晴らしい根性である。

しかし、背を丸め、鼻から流れ落ちる血を両掌で受け止めている堤下の頭を、竜蔵が両手でガッチリ押さえ込む。

そして、堤下の顔面目掛けて膝蹴りを下から打ち込んだ。

竜蔵の膝蹴りに、堤下の体が仰け反りながら後方へ吹っ飛んでいく。その口や鼻から鮮血が飛び散り畳を汚した。

そして、鮮血に混ざって硬いものが、畳みの上に散らばって落ちていった。堤下の前歯だ。

苦痛に顔を歪ませる堤下の上顎から、前歯四本が無くなっていた。

下がる堤下を竜蔵が、散歩をするような歩みで追いかけていく。とどめを刺しに行くつもりだ。

その技を見逃すまいとアキラがまばたきを忘れて食い入るように見詰めていた。

「だあっ！」

迫る竜蔵に、堤下が前蹴りを放った。もう勝負は着いたと思っていたアキラが、反撃を行う堤下の根性に驚く。

あとは、竜蔵が、どうとどめを刺すかだけだと思っていたが、堤下が消える間際の蠟燭の火の如く根性を見せたのだ。

抵抗を見せる堤下の前蹴り。しかし、速さも力強さも感じられなかった。

本当に、最後の力を振り絞って放ったのであろう。

だが、竜蔵がその蹴り足に対して、上から肘と、下から膝を突き上げ挟み込む。

「きいあああ！」

堤下が悲鳴を上げた。

竜蔵が肘と膝で挟み込んだのは、堤下が繰り出した前蹴りの先端であつた。

膝が踵を突き上げ、肘が爪先を上から潰していた。

「うあ！」

倒れこむ堤下のつま先が変形して潰れていた。
それを見たアキラが目をそらして声を上げたのだ。惨たらしいと言いたげに。

「野獣餓って言う技ですよ」

「えっ？」

顔を背けたアキラの後方から、男の声で竜蔵が見せた技の名前を語る声が聴こえてきた。

アキラはその声に驚き素早く振り向いた。

そこには黒縁のやぼったい眼鏡を掛けた男が立っていた。

アキラの直ぐ真後ろ、息を吸う音すら聴こえそうな距離だった。

何時の間にか自分の背後に立っていた男にアキラは驚きの顔を隠さず目を丸くさせていた。

そして、少し距離を置く。

身長は、アキラと比べて頭一個分ほど男の方が高いだろうか、顔付きも体付きもスマートに見えた。

だが、体は引き締まった筋肉で出来ているようだった。

やぼったい黒縁の眼鏡の下には、竜蔵や瑠璃子に似たイメージの笑みがあった。

しかも、結構な美形だ。目は切れ長で髪が長い。顔だけ見たら女性と見間違いそうだった。

アキラが思わずその顔に見とれてしまう。

道場内では、潰れた爪先を抱えながら呻く堤下を余所に、玄関に立つ二人に気付いた竜蔵が、今まで戦っていたとは思えないほど穏や

かな表情で声を掛けた。

「やあ、アキラちゃん、来ていたのかい」

「あ、はい！」

竜蔵に声を掛けられ、ふと我に返るアキラは、うろたえる様に返事を竜蔵に返した。

「お、何だ、武留も帰って来ていたのか」

「父さん、ただいま」

親子がにこやかな顔で再開の挨拶を交わす。

そしてアキラは、自分の側に立つ美少年を、ずっと見とれるように眺めていた。

アキラと武留

わたしが投げ技や関節技対策を習得しようと考えて、不波流古武術の道場に通うようになって一ヶ月ぐらいだろうか。

あの晩、あの公園で、板垣亜美に肩を折られた。

それと一緒に空手家としてのプライドも折られた。

あの敗北は、わたしの生涯で、一番の屈辱と言えるだろう。とても我慢できるものではなかった。

肩に痛みが走るたびに屈辱に顔を歪める日々が続く中わたしは、父の紹介で、この不波流に通い始めたのである。

柔道対策だけを考えて練習するならば、光臨館空手の門下生にも、柔道経験者が沢山居る。

その人たちから柔道を習うという事もできた。

しかしわたしは、それ以上を望み、不波流の道場に通うことにしたのだ。

あの憎つくき板垣亜美の顔を、空手技でボコンボコンにした拳句、わたしが受けた屈辱と同じように……、いいえ、わたしが受けた屈辱以上の思いをさせてやるつもりで、不波流の技を習得しようと思いい、道場に通い始めたのである。

次に戦った際は、あの女が見たこともない凄い技で決めてやるつもりだ。

だからわたしは、あえて不波流を選んだのだ。

あの女に柔道をさせずに空手で圧倒して、スペシャルアタックで、屈辱的に倒し、敗北の二文字を心の底にまで刻み込んでやるつもり

だった。

わたしは、執念深いの。……怖い？

まあ、話を不波流古武道に替えると思います。

不波流古武術は、裏柳生の流れをくむ武術であると、わたしが始めて指導を受けた日に、道場主の竜崎竜蔵氏から聴かされていた。かなり歴史の長い武術らしい。

特に、柔術、和術、拳法には長けた流派だと言っていた。

拳法は聞いたとおりの打撃技のことである。柔術、和術は、柔道などに使われる技に近いものらしい。

竜蔵氏曰く、古武道と一口に言っても、その技術のジャンルは色々あるらしい。

武芸十八般を基本として、柔術、和術、拳術、剣術、居合抜刀術、薙刀術、槍術弓術、短刀術、棒術杖術、鎖鎌術、分銅鎖術、手裏剣術、含針術、十手術、鉄扇術、鉄鞭術、砲術、捕手術、騎馬術、水術、もじり術、忍術、こういったものすべてが古武道に当てはまるらしい。

なんだか良く分からないものも多い。

本当は、まだまだ語れば沢山のジャンルがあるらしいが、きりがないしわたしも覚えられないので、この辺で説明を中断してもらったぐらいだ。

不波流もこれらをすべて扱うらしい。

まあ、初日の稽古は、そんなうんちくを道場内で聴かされて、ほと

んど体を動かすような稽古はしなかった。

正直、言葉攻めで頭はかなり疲れたけど……。

でも、次の稽古の日からはまったく状況が変わって、実戦を交えた稽古が始まったのだ。

「まずは体で体験してもらいましょうか」って竜崎氏が言い出すと、わたしの体を練習用の人形の様に色々な技を掛けてきた。

もう、オモチャ同然だった。

わたしが投げ技と関節技を知りたいと言って道場にきたもんだから、一時間ぐらい投げられるは、決められるは、で、酷い目にあっただけで感じだった。

治りかけていた肩が、また壊れるかと思うぐらいだったのよ。

でも、随分と勉強になった気がする。

自分がやられたことのない投げ技や関節技の数々を体験出来たのだから。

投げられる瞬間、こんな感じなんだ、とか。

決められると、こんな感じで動きが封じられるのか、とか。

空手道場だけでは、体験できないような未知の体験が出来た。

光臨館館長の娘として生まれて、今まで闘争の中で過ごした十八年間だけど、わたしの知らない技が、まだまだ世の中には沢山あるのだと思い知らされたって感じだった。

もう、びっくりよ。

それなのに竜蔵氏は、今見せた技が古武道の技の中では、氷山の一

角だと言う。

やはり武術は、奥が深い。

そして、不波流の道場に通り始めて七回目の稽古の日、その人と出会ったのだ。

その日、わたしが不波流の道場に顔を出すと、先客の男性が竜崎竜蔵氏と向かい合っていた。

二人とも道着姿で、厳しい表情だった。

あとから聞いた話では、道場破りだったらしい。

相手は、『野獣餓』と呼ばれる不波派の技で、片足の爪先を無残にも砕かれ、救急車で帰っていった。

相手の男を撃破した竜崎竜蔵氏は、何時もにこやかな表情をしているが、武道家としての實力は、異常なレベルだと稽古を付けてもらっている間に感じ取れた。

おそらく、この人の實力は、わたしのおじいちゃんやお父さんと同じくらいだと思う。

わたしのおじいちゃんとお父さんってのは、光臨館の会長と館長である。

とても強いんだから。

まあ、そんな感じで竜蔵氏が道場破りを撃退したときに、その人に出会ったの。もう、運命かもしれないと思っちゃった。

わたしが、野獣餓って技を見て驚いていると、突然後ろからわたしに囁いて来たの。今の技が野獣我だと言う事を。

わたしがその言葉に驚きながら振り返ると、そこには彼が立っていたの。

わたしよりも頭ひとつ分ぐらい背が高くて、綺麗な顔をした彼が。

最初は、男性の声が聞こえて振り返ったのに、女性が立って居るのに驚いたわ。

でも良く見たら、それは絶世の美男子で、女性なんかじゃなかったの。

映像や雑誌以外で美女を見た経験は、女子高の頃に、生徒会長を勤めていた先輩が一番美しかったと覚えている。
密かに恋するぐらいに美しい人だった。

やはり美人というものは、生で見ると存在感が違うものだと思った。
でも彼は、その時の先輩よりも、更に美人に見えたのだ。
なんか良く分からない光を放っているように感じたの。

肌は透き通るほどに白く、長い髪は美しくサラサラしていた。わたしほどじゃないけどね。

わたし、長く艶のある長い髪が自慢なの。へへ〜ん。
まあ、今はそんなことより……。

そして彼は、切れ長で魅惑的な瞳で、わたしを見詰めていたのだ。
おもわず、その美しい瞳の中に吸い込まれるところだった。

パツと振り向いて顔だけ見上げたわたしが、彼のことを女性と見間違っている仕方がないほどに美しい顔立ちだったのよ。

でも、黒縁の野暮ったい眼鏡は、ちょっと無しかناと思ったけど。
美しい顔が台無しに見えた。

まあ、百二十点の美男子が、二十点ぐらい減点されても、まだまだ百点残る。

野暮ったい眼鏡の減点なんて問題にもならない。

何が言いたかった？

そう、わたしは一目で恋に落ちたのだ。この美男子に。
簡単に言えば、一目惚れってやつよ！

彼の名前は、竜崎武留というらしい。

竜蔵氏の息子さんだ。

偶然にも十八歳、わたしと一緒に、同い年よ、ラッキー！
これは運命よね、きつと！

彼は高校卒業後、一ヶ月ほどアメリカの知り合いの家に、ホームステイに行ったらしく、それで今まで顔を見なかったようだ。
何でもアメリカで暮らすのが夢だったらしく、卒業祝いでホームステイのプレゼントを貰い、今までアメリカに行っていたらしい。
そしてたまたま、わたしが稽古の日に帰ってきたのだ。

やっぱりこれは、運命よね！

今まで週に二回でいどしか通ってなかったけど、明日からは毎日、不波流の稽古に通おうかなと考えていた。

問題は無いわよね、きつと。うん、ないない。

そして今日からわたしこと、王森アキラと、竜崎鳴海君とのラブストーリーが始まるの！

そう、これは決定事項だ！
誰にも邪魔はさせないわ。

そんなこんなで、邪魔くさかった道場破りが消えてからしばらくたつと、武留君も交えての稽古が始まった。

竜蔵氏が声を掛けて、そう言う事になったのだ。未来のお父さんナイス！

そして、わたしをここまで育ててくれたお父さんさようなら。

娘は空手を捨てて、古武道の家に嫁ぎます！

道着を身にまとった武留さんは、とっても凛々しかった。

やっぱり美男子は、何を着てもさまになるものね、みとれてしまうは、じゅるるる。

おっと、思わず涎が……。

それから二時間過ぎると、甘い甘い武留君との稽古の時間が終わってしまった。

楽しい時間は、あっと言う間に過ぎ去ってしまうものなのね。

なんとなくシンデレラの気持ちが分かったような気がした。実に名残惜しい。

そして稽古の終わり際だった。

「アキラさん、最後に一言だけいいですか」

「は、はい!？」

「自分事なんですが……」

「な、な、なんでしょうか!？」

初めて武留さんから声を掛けてくれた。しかも私情の話らしい。お

もわず、どもってしまった。

「僕、女性には興味ないので、稽古以外のプライベートでは、話しかけないでくださいね」

「え!？」

彼は、にこやかに微笑みながらそう言ったのである……。

わたしの乙女心の中で、何かが停止したように感じられた。
それが、奈落の底へと墜落していくのが分かった。

「僕、ホモなんです」

「いいいいいいいいいやあああああああああああああああ
ああああ!!!!!!」

わたしが頭を両手で抱えながら絶叫していると、自称ホモ野郎が肩を軽く叩いてきた。

わたしは、体を震わせながら大きく見開いた両目を、ばっちい物でも見るようにホモ野郎へと向けた。

もう、この美男子の顔が、汚らわしいXXXにしか見えなくなっていた。

先程までの眩しい輝きは、これっぽっちも感じ取れない。当然であろう。

「アキラさん」

「な、な、なによ!」

「嘘ですよ」

「え……？」

ホモ野郎は、笑顔でそう言った。

「アメリカンジョークですよ、ジョーク、ジョーク。ホモなわけないじゃないですか、あははははー」

「そんなのアメリカンジョークじゃあ、ねえーよ！！」

わたしの恋心が、乙女心が、今この瞬間、殺意へと変貌していく。

「きいえええー！！！！」

わたしが我を取り戻したときには、すでに武留の首を両手で絞めていた。

そこには、武道家のプライドも、乙女心も無く、ただ憎しみのままに……。

これが、彼との出会いだった。

眼鏡の訳

その日は、竜崎家の敷地内にある不波流古武道の道場に、光臨館空手の王森アキラが出稽古へと来ていた。

本日は、道場主の竜崎竜蔵氏は居らず、息子の竜崎武留が、ひとりでアキラの相手をしていた。

基本的に行われているのは、投げや関節の稽古だった。

投げる前に相手をどう崩すか、グラウンドに入ったら何処を取るか、そういった稽古を武留がアキラに指南していた。

そして今は、受身の稽古中である。

武留は、目が悪い。

女性のような美しい顔に掛けられている黒縁の眼鏡、そのレンズは、目の良い人が掛ければ逆に何も見えなくなる程にぼやけてしまう。アキラが悪ふざけで眼鏡をうばい掛けてみると、くらくらと眩暈がするほどだった

武留の視力は、両目とも0.01以下らしい。眼鏡なしでは何も見えないとのことだ。白い光も目にこたえる。

武留は、視力障害者の認定を受けていた。網膜剥離だ。

その為、武留は武道家として厳しい常態にある。打撃技が見えないのだ。

それに強い衝撃を頭部に受ければ網膜剥離が悪化する可能性があった。

ハードコンタクトを付ければ0.5ぐらいになるらしい。

コンタクトを付けずに組み手をしたら、前に立つ相手がぼやけてし

が見えず、打ち込まれる技はすべて何となくしか見えないらしいのだ。

正拳なのか掌打なのかが分からないのだ。

だからといって、避けられない訳ではないらしい。

その事を聞いたアキラは、武留が格闘技家としてキツイ常態なのだと思った。

アキラの居る光臨館空手の道場にも、視力が0・02や0・01しかない選手が何人も居る。

稽古中や試合の際にはコンタクトを付けてのぞんでいる。そのぐらの視力しかなくとも武術に励む人物は少なくはないらしい。

しかし武留は、そのような人物よりも重症だ。網膜剥離は流石にヤバイらしい。

視力も0・01以下は、どのぐらの視力なのかは医学的にも測れないらしく、0・02の人物に比べて武留の視力は明らかに悪いとのことだ。

しかも武留は、コンタクトを普段から嫌っている。目に負担がかかり疲れるかららしい。

ドライアイが激しくキツイのだ。

だが、相手と組んだ常態であれば、目の不自由な武留でも技が難しく使えた。

投げ技や関節技は、相手を掴んでさえいれば掛けられるのだ。

それでも、コンタクト無しでは盲目に近い形での技だ、かなりの稽古を積んで実現した状況らしい。

そんな訳で、武留からは稽古中に、投げ技と関節技を中心に、アキラは教わっていた。

もともとそのふたつを習いに来たのだ、問題はなかった。

ふたりは互いに白い道着をまとい、長い髪をポニーテールにまとめていた。

アキラの髪は、ポニーテールに縛っても、ヒップの辺りまである長いものだった。本人も、唯一女の子らしいと、その長いポニーをチャームポイントにしている。

手間はかかるが絶対に短くする気はないらしい。

武留も男のわりには髪が長かった。首より少し下ぐらいまでの長さがある。

普段は、縛っていないが、稽古中は邪魔になるらしく後ろで縛っている。

武留は、ただでさえ女のような顔をしているのに、この長い髪のせいでいっそう女性と間違われることが多い。

本人も間違われることに抵抗が無いというよりも、わざと間違われようとしているふしがあった。

短い付き合いだ、アキラにもそれが直ぐに分かった。

ホモやオカマではないのだが、女装癖があるのではないかとアキラが疑い、本人や姉の瑠璃子に訊いてみた。だが、さすがにそれはなかったらしい。

ほっと、胸をなでおろしていた。

アキラは正直なところ、異性として武留に好意をいだいていた。

しかし、彼と出会った日にかまされた自称アメリカンジョークのせいで、何かと疑ってしまうことが多かったのだ。

あの日の一発だけではないのだ。武留は時々、自称アメリカンジョークをアキラに対して放つ。

その内容はアキラから聞いてジョークに取れないことが多かった。

例えば、「稽古のあとに、一緒にお風呂にでも入って汗でも流しませんか、女の子どうしなんだし」とか、「アキラさんは、好きな人がいますか？ わたしは今、恋をしているんですよ。あの逞しいボーディーを保つ父に」とかである。

他にもまだまだ、このようなことをアメリカンジョークといいきり言うのだ。

「嘘ですよ、ジョークですったら」と、最後には言うが、そのたびにアキラは目を丸めたり顔を青ざめたりする。

武留曰く、頭に思いつくと言わずにいられないらしい。どうやら癖のようだ。

そのようなジョークを、もう十回以上かまされた。何度かまされてもアキラは慣れることができなかった。

このジョークを言うのをやめれば、武留は文句のつけようがない程にいい男なのだと、アキラは何時も思っていた。

とにかく武留は、顔が良い。美男子だ。それだけで点数が高いのだ。酷いジョークさえ言わなければ人格にも問題点が少ない。しかも目は悪いが、武道家としても十分に強い。

アキラはそんな武留に好意をいだいていた。恋といえた。

武留がアキラを払い越して投げると、アキラが綺麗な受身を取って畳みを叩く。パンッと音が鳴って道場内に轟く。

投げられたアキラは、投げた武留の顔を下から見上げていた。そこには宝塚の男役の様に美しく凛々しい顔が、僅かに汗を流しながらあった。

それを見上げたアキラの顔が、うっとりとし、頬を赤らめる。

しかし、そのアキラの表情は、投げた武留には見えていない。

「さあ、立ってください、アキラさん」

「はい」

優しく微笑んで武留がアキラの裾を引いて、彼女が起き上がるのを手伝う。アキラは、緩んだ表情のまま、アキラに手を引かれて立ち上がった。

とても稽古に身が入っているようには見えないが、目の不自由な武留は、それに気づくことはなかった。稽古を続ける。

そして、また武留が、緩んだ表情のアキラを投げ飛ばした。道場内に受身を取る音が響き渡る。その繰り返しだった。

栗毛の少女

武留の姉、瑠璃子が玄関先で竹箒を使い落ち葉を集めていた。集めた茶色い枯葉が、こんもりと山になる。

瑠璃子は玄関の扉に竹箒を立てかける。

そしてエプロンの下にあるポケットからマッチを取り出すと、枯葉の山の前にしゃがんだ。

シュッとマッチをする乾いた音が鳴る。

瑠璃子はマッチを擦って火をつけると枯葉の山に投げこむと、やがてマッチ棒の火は、乾燥した落ち葉に燃え移り炎へと変わっていく。瑠璃子は、しゃがみながらひとりで、その炎をじっと見つめていた。

そこに一人の少女が、スチャスチャとした足取りで寄って来る。

身長は低かった。おそらく150センチぐらいだろう。小柄で可愛いらしいイメージが強い。

栗毛色の短い髪に、くりくりとした大きな瞳で、燃え上がる焚き火の炎を見ていた。

瑠璃子も駆け寄ってきた少女に、すぐに気付く。瑠璃子が顔を上げると少女のほうから話しかけてきた。

「おねーちゃん、何してるのですか？」

あどけない口調だった。年のころは12、3歳ぐらいだろうか。

背中にピンクのウサギ型のリュックを背負っていた。そのウサギの耳が、少女の後ろで揺れていた。

突然あらわれた少女に微笑みながら瑠璃子が答える。

「お芋をね、焼いているの」

「焼き芋を作ってるのですの？」

「うん、そうよ」

瑠璃子が優しい口調で答えると、何故か少女も焚き火の前にしゃがみこむ。

幾つもの花柄がプリントされた白いTシャツの胸は、幼い少女らしくぺったんこで、ボリユームの欠片もない。
そのTシャツの下には、黒いスポーティーなスパッツを履いていた。
可愛らしい膝っ小僧が見えている。

「お芋、幾つあるのですか？」

「二つあるから一緒に食べましょう？」

「ほんとう！？」

少女が明るい声と共に瑠璃子の優しい顔を見た。瑠璃子は、その可愛くも輝く表情に尚も優しく微笑み頷く。

二人の周りに焚き火の暖かさのほかに、なにやら和やかな空気が流れていた。

ほのぼのとしている。

「でも、二つしかないから、皆には内緒よ」

「うん！」

瑠璃子の言葉に、少女が元氣良く答えた。

そのあと瑠璃子と少女は、焚き火の中にある芋が焼き終わるのをじっと待っていた。

そして、しばらく経つと枯葉が燃え尽き、灰の中からポイルに包まれた芋を取り出す。

「あつっ！」

二人は熱さを堪えながらポイルの包みを開けると程よく焼けた芋を取り出し「あちあち！」と言いながら食べ始める。

「はい、お塩もありますよ」

「ありがとー」

瑠璃子がポケットから塩の入った小瓶を取り出し自分の分の焼き芋に振るうと、今度は少女に手渡した。

ふたりはしばらくの間、のどかに焼き芋を堪能していた。そして、焼き芋を食べ終わった瑠璃子が、少女に問う。

「ところで、どちらさま？」

問われた少女は、まだ食べ終わらない焼き芋を口の中でもぐもぐさせながら瑠璃子に答えた。

「あのー、こちらに竜崎武留さんと、光臨館空手の王森アキラさんが居るとお聞きして尋ねて来たのですが……」

「あら、二人のお友達だったのね」

「え〜と」

「今、裏の道場で稽古中よ、お芋を食べ終わってから行ってみるといいわ」

瑠璃子はそう言いながら微笑むと、玄関の中へと消えていく。

栗毛の少女は、その背中を見送りながら、残りの焼き芋をほおばった。

「おいしかった！」

そう言い立ち上がった少女は、背中に背負ったウサギの耳を揺らしながら裏手の道場に走る。

目的地の道場から受身を取り叩かれる畳の音が響いてくると、栗毛の少女は背を丸めて息を潜めた。

そして、フルオープンの玄関から中を、こそこそとした仕草で覗きこむ。

「こんにちは〜」

中に向かって挨拶をした少女の声はとても小さく、稽古に励む武留とアキラの耳には届かなかった。

「あの〜、こんにちは〜」

やはり声が小さすぎて二人は少女の存在に気付かない。

少女は扉の陰に隠れる様に、二人の様子をじっと見つめていた。

「少し休みましょうか、アキラさん」

「はい」

しばらくして二人の稽古が止まり、休憩を取る様子だ。

そこでやっと栗毛の少女は物陰から姿を出し、もういちど「こんにちは」のどかな感じで挨拶をした。

「あら、だれ？」

挨拶に気付いたアキラが、キョトンとした表情で小さな少女を見た。

「こんにちは。どちらさまですか？」

眼鏡を掛けた笑みで武留が挨拶を返すと同時に誰かと問う。

それに少女が答えた。

「小笠原・オルインピアード・こずえと申します」

栗毛の少女は、ながったらしい自分の名前を言うと、あどけない表情で微笑んだ。

その名前を聞いたアキラが「名前、長が！」と、つつこみを入れるように一人で呟いていた。

「それで、小笠原・オルインピアード・こずえさん、何か御用ですか？」

「うわ、一発で名前覚えたよ！」

今度は、一度しか聞いていないのに少女の名前を覚えた武留にアキラがつつこみのような声を飛ばしていた。

「えーと、竜崎武留さんと、王森アキラさんですよね？」

「ええ、そうだけど？」

何故に自分たちの名前を少女が知っているのだろうと疑問に抱きながらもアキラが答えた。

そして、軽く首を傾げてポニーテールを揺らす。

「あの、お二人にお願いがあるのですが……」

「なんだい？」

武留がやさしい笑みで訊く。アキラもそれを見守る。

「わたしと戦って、哀れにも負けてください！」

とぼけた台詞だった。

「えっ……、なにぬかしてるの、このガキ……」

アキラが呆れながらも表情を引きつらせながら言った。武留は、それでも微笑んでいた。

「な……なんで行き成り私たちが、あんたみたいなお子ちゃまと戦わなくちゃあならないよの……」

アキラの声には、若干のいらつきのようなのが感じられた。それは、表情にも出ていた。

「わたし、お子ちゃまじゃないもん！」

そう言ってこずえは、背中に背負っていたウサギのリュックから小学生が持っていたような可愛い財布を取り出すと、一枚のカードを取り出した。

それを二人の前に差し出す。

「車の免許書？」

二人はそう呟きながら、そこに書かれた生年月日を見た。

「え！ 二十歳、うそ！？」

アキラと武留が揃って目を丸くさせていた。冗談にも程があると。しかし、目を擦って何度見直しても、免許書に書かれた数字が変わって見えることはなかった。錯覚でも幻覚でもない。

「ほんとでーす」

驚く二人に対して勝ち誇った態度をみせるこずえは、確認させた車の免許書を財布にしまった。そして財布をウサギの中に戻す。

「嘘でしょ……、どう見ても小学生じゃなか……」

驚きそう言うアキラだが、こずえの年齢は本当に二十歳である。嘘でも冗談でも、武留のジョークのようなふざけたものでもなかった。

二人よりも年上なのだ。

「ところで、何でわたしたち二人と戦いたいのですか？」

アキラと違い冷静な武留がこずえに、肝心の戦いたい理由を訊いた。こんなに可愛らしいが、道場破りのつもりで訪ねてきたのならば、ここは不波流の道場、アキラには関係ないことだ。

しかし少女が戦いたいと言うのは、武留とアキラの二人。少々話の目的が見えてこない。

そう疑問に思い訊いた武留に、こずえは素直に答えた。

「あのですね。板垣亜美って人に、あなた方を倒したら、お金をくれると言われました」

「板垣亜美ですって!？」

その名を聞いてアキラが大きな声を上げた。

板垣亜美と言えば、二ヶ月前にアキラの左肩を脇固めで折った女だ。

その女が何故にとアキラは言いたげに怖い表情をしていた。

そして、双眸に殺気が宿る。

「どう言う事ですか？」

いまいち納得の行かない武留が訊きなおすが、こずえは「そう言うことですの、と答えるだけで話が進まない。

そのやり取りを横で聞いていたアキラが、怒りの表情のまま、いいわよ、受けてあげるわよ、と怒鳴り散らした。

その返答にこずえは微笑むが、武留は眉を顰める。

何かが可笑しいと思いながら。

「そのかわり、私が勝ったら全部話してもらおうからね！」

大きな声で怒鳴るアキラにこずえが、はい、勝てたんですがね、と明るい笑みで茶化すように答えた。実に緊張感のない態度であった。

栗毛の少女（後書き）

彼女は、歩くときにスチヤスチヤと音が出る。

きつと！

コマンドサンボ

不破流古武道の道場内で行なわれようとしているアキラとこずえの勝負。

こずえがウサギのリックサックの中から青いカラー道着を引っ張り出して着込むと、黒帯びを腰に巻いた。

「あの人、サンボだね」

特徴的なカラー道着を見て語る武留。

サンボとは、ロシアの格闘技である。

基本は日本の柔道をベースにしている為、柔道の道着によく似たジャケットを着るが、下半身は道着を穿かず、アマチュアレンリングに似たものを身に付け、裸足でなくシューズなどを履く。

技の内容も柔道に似ている格闘技だが、アマレスの要素も強く、脚を掴みに行き、倒す技もある。柔道の公式ルールでは下半身を取つての関節技など禁止が多いが、サンボではその手の技が多い。

また、相手に飛びついてからの変則的な入りをする関節技でも知られているだろう。

こずえは更に、レスリングシューズに膝サポと肘サポを装着している。結構な重装備である。

「ふふ、何よ、あの子。サポーターなんか着けちゃって。アレでも格闘技家の積り、笑っちゃうわ」

道場の隅で準備をするこずえを眺めながらアキラは、武留の側で諍るように笑っていた。

しかし武留の目は厳しくこずえを見つめて居る。そしてこずえがウサギのリュックから拳サポを出し装着を始めると、更に武留は表情を除しくしてアキラに囁く。

「あの人、サンボじゃないね」

Tシャツの上に青いカラー道着。両手足と両拳にはサポーター。そしてレスリングシューズ。

柔軟運動を開始したこずえを見ながらアキラは武留に、何が可笑しいの、と問う。

「拳サポを着けた。――あの人、打撃を使ってくるよ」

「それが？」

「あの人、コマンドサンボだ」

コマンドサンボと聞き首を傾げるアキラ。聞いた事のある格闘技だが、サンボとコマンドサンボの違いが判らない。正直同じものだと思っていた。

その疑問が表情に表れたらしく、準備運動をするこずえを余所に武留が説明を始めた。

「サンボってやつは、一般の大会用にコマンドサンボからコマンドを抜くと同時に打撃などを取り除いた、いわばスポーツです。サンボに打撃技等を復活させるとコマンドサンボに戻ります」

「柔道に打撃技が増えたようなものね」

「正確に言えば、古武道の中から柔道が別れていく前に戻ったと言え方がいいでしょうかね」

「解り難いわね……」

元を正せば柔道は古武道の分家である。武留は、それが言いたいのだろう。

武留が話を続けた。

「コマンドサンボは名前を聞いての通り、戦場格闘術。軍事格闘技です。

彼女が学んだ格闘術が、コマンドサンボならば、少なくとも打撃は使ってくるだろうし、もしかしたら目突きや金的の類も使ってくるかも知れません」

上等よ、と微笑みアキラが、右券を左掌内に打ち込む。パンツと景気の良い音が響く。

攻撃的に高揚している。

アキラとて目突きを使用したことは無いが、父より習ったことがある。使用技術も防御方法もだ。

金的は、何度かウザイナンパ男に打ち込んだことはある。もちろん全力ではない――。

故に今更そのような禁じ手など怖くはなかった。

アキラの肩に武留が手を添えた。優しいボディータッチに乙女の血気が照れ臭そうに低下する。

「ですがね、アキラさん。そんな技より怖いのは、殺しに来る技の

数々です」

「殺しの――技？」

「軍用格闘技ですよ。基本は人を殺す為の技術です」

確かに、そうだろう。

「コマンドサンボは、ナイフ術、警棒術、銃剣道の防御方にも長けていますしね」

「銃剣道？」

「ライフルの先にナイフが付いているでしょう。あれで戦う技術です。」

日本の自衛隊やアメリカ軍では、おまけ程度にしか使用されなくなり随分と廃れた武器だけど、中国や韓国、北朝鮮ではまだまだ現役の戦闘技術です。室内戦では、手槍と大差無い戦闘力になりますからね。

それに磨けば十分に怖い格闘術にありますよ」

手槍と三四尺の短めの槍である。

そんなことよりコマンドサンボです、と言いながら武留が話を戻す。

「コマンドサンボが、他の格闘技と違う個性は、投げに入る瞬間です」

「飛びついたりする――あのアクロバティックな入りのサブミッションのこと？」

「アキラさんは、プロレスの見すぎですね」

無知を誇られた。

武留に言われてアキラは不思議そうな顔をする。

「コマンドサンボの個性は、投げ技の入りに入る前、細かな当て身を入れてくるんですよ。

柔道などが投げを撃つ前に、相手を引いたり押したりして崩しを入れてくるようにコマンドサンボは、崩しのほかに当て身を入れるんです。

掴んだら、崩して、当てて、投げる。これを一連として仕掛けてきます。

崩しと当て身が同時だったり、投げのモーションと当て身が同時の場合も多いですよ。そこに気を付けてください」

気を付けろと言われても——具体的な技は、とアキラが真剣な表情で訊く。

「足を踏んだり、脛を蹴ったり、肘を当ててからの投げ——頭突きに膝蹴り」

地味だか効果的だろう。

しかも訓練された技だ。注意すべき小技である。

「背負い投げのモーションで、踵を後ろ蹴りで脛に当ててきたり、大外刈りの入りで親指を喉に刺してきたり。

一見卑怯に聞こえるだろうが、戦場では汚くても死んだ方が負けですからね——。

人殺しを目的とした術ならば、恥じるところは微塵ありません」

アキラは、空手だって同じだ、と心で呟く。

それに不破流古武道もまた、それらと同様の格闘術である。その事には、この道場に通り始めてアキラも気付いていた。

不破流は大会に勝つ為の、客から金を取る為の格闘術ではない。

戦場で人を殺す為の武術である。

それに関しては、悔しくあるが空手以上だ。

「それにあの人は、コマンドサンボの技を、殺人技を仕掛けてくる可能性が高いですよ」

「そうね。あんなに小さな体で私だけあらず、男性の武留君にも勝負を挑んでくるのですもの。」

間違いない力技では勝てないから、急所を攻める怖い技を使ってくるでしょうね」

それは何となくアキラも感じていた。そして武留の話聞いて確信したのだ。

小さく可愛い子供に見えるが、舐めていたら大怪我をする。

あの矮躯で勝利を獲得するためには、殺す気の技しか有り得ないだろう。

もう、騙されない。

もう、油断はしない。

あの夜の公園での敗北は、すべてが油断。驕りが原因。詰まらない理由で負けては要られない。

これ以上は——負けたくない。

ただ、負けたくないのだ。

準備運動が終わったこずえが、スチャスチャと可愛らしい足取りで前に出た。アキラも武留に見送られながら前に出る。

二人が道場の中央で、向かい合った。

こずえは子供のような笑顔だった。アキラは気を引き締め真剣な眼差しをしている。

やはりこの戦いも、開始の合図は無いだろう。

アキラが拳を握りしめて構えを作ると、こずえが背を丸めて両手を前に出した。

試合は始まった。

小さな構え

道場の入り口が開いていた。

そこから緩やかな風が涼しげに流れ込んでくる。

その微風を受けながら武留は、道場の隅で立ちながら二人の乙女をじっと見ていた。厚いレンズの眼鏡を掛けている。

アキラとこずえの二人は、各自が学んだ格闘術の構えを取っていた。

膝と背を丸めて中腰となるこずえ。アマレスのフリースタイルが見せる構えだ。

露骨に組み付きを狙っているのが悟れた。腰から下を狙って来るだろう。

子供のようになつたこずえが身を丸めたために、更に小さく見えた。

だが、小さく見てはいけない。小さいから弱々しいと感じてはならない。

これはコンパクトとなったのだ。

侮ってはいけない。

夜の公園での一戦を思い出すアキラ。

板垣亜美との対決で、彼女も似たような構えを取っていた。グラップルを狙っている構え。

こずえが見せる構えは、板垣亜美以上に小さく低く作られている。

やり辛い。

小さすぎて逆に攻め難い。

実にコンパクトな防御スタイルである。己の小さな体格をハンディ

とせずに、逆に利用していた。

どんなに鋭利な刃物を持って攻撃しようとも、素早く飛び交うハエを斬り落とすのは難しい。

離れた場所からネコの額を拳銃で撃ちぬくのは難しい。

それらと一緒である。

こずえは小さく構え、低い位置に居る。そのことが空手家であり打撃が一番得意なアキラからは攻めずらいのだ。打撃が当て難いのである。

脇はちゃんと閉じられている。

正中腺に沿っての急所は、身を屈めた為に、アキラの視線からは窺えない。

顔面の前には掴み掛かろうと意思表示を見せる両手が並んでいるが、防御の位置にもなっている。

教科書どおりに打術攻撃で狙える脆弱なポイントはない。

こずえの構えは、理にかなっていた。厄介である。

だが、そうも言っていない。

これから戦うのだ。攻略しなくてはならない。

アキラはポニーテールに束ねた長い黒髪を揺らしながら爪先でステップを刻み始める。

そして空手ではあり得ない構えで眼前に立つ対戦者に有効な攻撃方法を詮索した。アキラの可憐な表情に力が入り眉間に二本の皺が寄る。

敵はサンボ。組み技のスペシャリストだ。

こちらは古武術を通して組み技を齧り始めたばかり。技の熟練度に大きく差があるのは明白だ。

板垣亜美との戦い同様に、組まれたら一瞬で危うくなるだろう。相手が自分より小柄でも、その可能性は高い。

身長差、体重差、パワーの違い。それらがアキラに有利があっても、組み技を使用されれば一瞬で覆されるだろう。

この道場で古武術を学んだことにより、それらが鮮明に理解できていた。

アキラの組み技レベルでは、小さな体躯のこずえと組み合っても負けるのが予想できた。

組み技の恐ろしさは、骨身にしみている。

ならば空手を使ってどのように攻めるか。

そこを模索しなくてはならない。

打ち下ろしの拳――。

頭部に当てても、目標が低すぎてバランスを崩し、威力が半端になる。その後に下半身に組み付かれるだろう。――駄目だ。

左右からのローキック――。

頭部と横腹には直ぐにガードが間に合うだろう。やはりその後組み付かれる。脚には遠すぎてローキックが届かない。肘のガードも直ぐに間に合う。――駄目だ。

カウンターの膝蹴り――。

相手は自分より小柄であるが、己もパワーがある方でない。一発を

クリンヒットできなければ組み付かれる。窮地に追い込まれる可能性の方が高い。――駄目ではないが、できれば避けたい。

前蹴り――。

牽制にはちょうど良いだろう。大きなダメージは期待できないが、地味に効果が出るだろう。

それに次への進展が期待できる。前蹴りで体制を崩しといて次の有効打を打ち込む。――これだ。

万が一に接近を許す事態になれば、組まれる前にカウンターの膝蹴りや肘打ちをお見舞いする。

大体のプランが完成した。

やはり組まれる前に勝つ。組ませず殴る。

この空手家としての鉄則を守りきって戦わなくては、自分に勝利の芽が無いだろう。

板垣亜美戦のような屈辱はゴメンだ。組み技にねじ伏せられる情けない結果は、もう嫌だ。

ましてや今は、武留が見ている。

彼の前で無様に負けるわけには、絶対に行かない。

空手家のプライドよりも乙女心が許さない。

この勝負、絶対に勝つ。

死んでも負けない。死んでも勝つ。負けても勝ってやる。

ステップを踏みながらアキラは、道場の隅に立つ武留をチラリと見た。

彼は穏やかな表情で此方を見ている。戦いを静かに観戦している。その姿を見てアキラの心に不思議と涼しげな風が流れ込んできた。熱くなった乙女の闘志が僅かに冷めて行く。少し熱くなりすぎたことに気付くアキラ。

ステップを刻みながら息を吸い込む。

アキラの陰しい表情から力が少しばかり緩んで、眉間に寄っていた皺が消えた。

そして前蹴りを繰り出そうと一歩前に出る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003g/>

ポニーテールデストロイヤー

2010年10月10日10時28分発行